



史蹟史料部

2024 年 9 月 9 日

#57

日本人墓地公園

ニュースレター

医師 安藤公三ゆかりの墓

昨年 9 月、史蹟史料部に、「100 年ほど前にシンガポールで暮らしていた親戚の情報を知りたい」というお問い合わせをいただきました。

その方がわかっている情報は僅かでした。お名前は安藤公三さん、安藤純一郎さん兄弟。シンガポールローカルスクールの名門校 Anglo Chinese school を卒業後、医者になったそうです。公三さんの方は昭南島の医療衛生行政の長として大きな病院を経営されていた。純一郎さんの方はペナンで病院を経営していたと同時に、ゴム園も持っていたそうです。

昭南島とは、1942（昭和 17）年～1945（昭和 20）年に日本がシンガポールを占領していた時代の名称でした。終戦後、日本人のほとんどは当地を離れていますので、その頃の記録はほとんど残っていません。

史蹟史料部の本棚に僅かにある手がかりは、シンガポール市政会が 1986（昭和 61）年に発行した「昭南特別市史 - 戦時中のシンガポール - 」という本のみでした。シンガポール市政会会員は、戦時中、市政要員として、昭南特別市と称したシンガポールの市政に当たっていました。



昭南特別市政は、人事、財政会計、経済、教育、警察、土木等の行政を担い、医師というキーワードを元に、「厚生衛生行政」のページを開けたところ、「防疫科」の項目に、お尋ねの安藤公三さんのお名前を見つけることができました。

厚生課長を務めていたのは、[ニュースレター #30](#)でご紹介した、篠崎護でした。厚生衛生行政は医療科と防疫科に分かれ、部長は安藤公三医師でした。シンガポールが熱帯地でありながらマラリア患者が意外に少なく衛生都市と言われていたのは、この防疫科のおかげだったそうです。防疫科は、防疫、防蚊、伝染病院、料理飲食業、食料品の衛生状況検査ならびに従業員の健康診断等の仕事がありました。

当時の市政庁は、現在のナショナルギャラリーの建物です。

衛生関係の科は、市庁舎の正面を登って右側の教会側の部屋にあったという記述があります。教会とは、聖アンドリュース教会のことだと思われます。



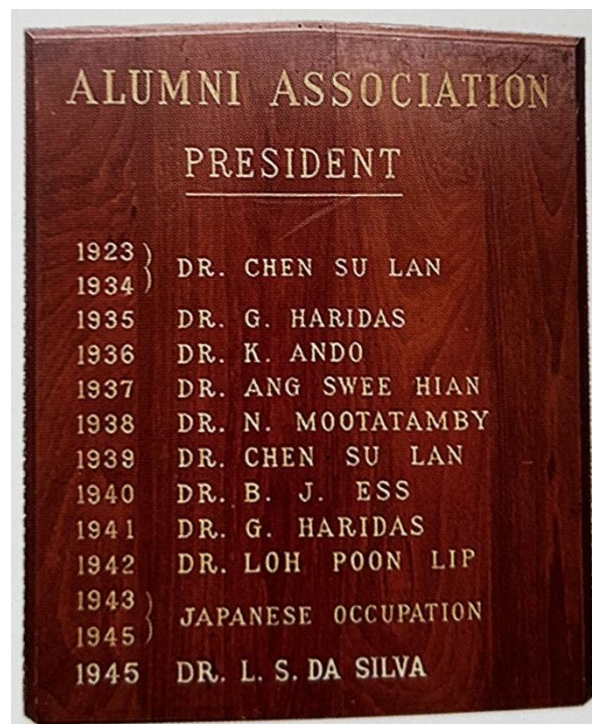
またシンガポール医師会の100年の歴史を綴った冊子の中にも、安藤公三さんの特集があります。シンガポール医師会の歴代会長のボードの写真では、1936年に公三さんの名前が刻印されているのを確認することができます。1923年～2023年の100年の歴史の中で、日本人医師の名前はお一人のみです。

1936 DR. K. ANDO



(写真上) 海峡植民地およびマレー連邦州政府医学学校の卒業写真より、後列一番右が安藤公三さん。

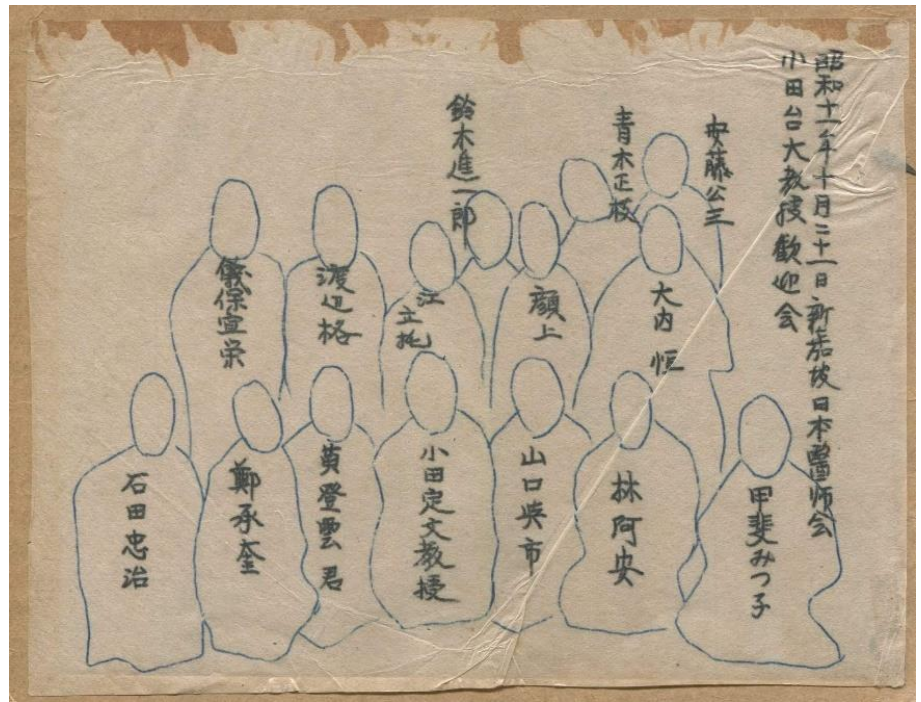
(写真右) シンガポール医師会の歴代会長名を綴った木製ボード



お問い合わせの方にその情報をお送りした2か月後、別件で、台湾の中央研究員 臺灣史研究所から、日本人墓地公園にある台湾人のお墓についてのお尋ねがありました。

日本人墓地公園には、台湾国籍の方のお墓がいくつかあります。当時の台湾には日本語を話せる医師が多かったため、ニュースレター#56でご紹介した石原産業の招へいでシンガポールに渡った方が多かったという資料をお送りいただきました。

資料の1つに、1936（昭和11）年のシンガポール医師会の写真がありました。偶然にも、その写真の後列右端に、安藤公三さんを見つけたのです。



日本人墓地公園には、安藤公三さんのご両親のものと思われる方のお墓があります。

向かって右の墓は
正面に**安藤家先祖代々之墓**
右に、**昭和六年四月十四日没**
俗名 安藤公平 行年七十七歳
左に、**俗名 安藤タマ**

向かって左の墓は、右側に
公平三男 安藤富士雄 二十有一

以上の文字があることを、日本人会発行の書籍「シンガポール日本人墓地－写真と記録改訂版－」で確認しました。



現地で墓石を確認すると、裏面に安藤公三さんのお名前を読むことができました。

昭和七年四月 安藤公三建之

公三さんご自身がこの先祖代々のお墓に眠っている記述はありませんが、このお墓が1932（昭和7）年に、公三さんによって建てられたことがわかりました。

しかし日本人会発行の「シンガポール社会百年史」のP185、次ページでご紹介する1986（昭和61）年のコラム【戦前の子は国際人】には、公三さんのお子さんが日本からシンガポールを訪れた時のことが書かれており、それによると公三さんはシンガポールで亡くなり、日本人墓地に眠っているという記述があります。



【戦前の子は国際人】

戦前シンガポールにいた日本人の子供たちは午前中ローカル校に行き、午後は日本小学校に通っていた。男の子はアングロ・チャイニーズ・スクール（ACS）やセント・ジョセフ学院に通い、女の子はメソヂスト・ガールズ・スクールやラッフルズ・ガールズ・スクールに通う子が多かったようだ。午前中は英語を話し、午後は日本語、近所の子供たちと遊ぶ時は日常語のマレー語、3カ国語をあやつっていた。

過日安藤さんという方が日本からやってこられた。安藤さんの父親はラッフルズ・カレッジ（シンガポール国立大学の前身）を卒業してミドル通りで開業医をしていた。シンガポールで他界され、日本人墓地に永眠している。安藤さんは定期的に父親の墓参を続けてきたが、既に80歳を越す高齢になり、今回で墓参りは最後だと言っていた。墓地の管理をくれぐれもよろしくお願いしたいと言い残して、寄付を置いてお帰りになった。

その折、安藤さんからこんな話を聞いた。

『――生まれてから16歳までシンガポールで育ちました。当地ではアングロ・チャイニーズ・スクール（ACS校）に通っていました。富裕層の子供が通う学校として名が通っていますが、名門校です。戦争が勃発する直前に日本に帰り、日本の大学を卒業して、東芝に就職しました。海外業務に就いて東南アジアにはたびたび出張しました。私はちょっと日本人離れした英語を話していたので、初めは日本人だとは思われませんでした。どこで英語を勉強したのかと聞かれ、シンガポールのACS校だと答えると、多くの人が親しみを持ってくれました。シンガポール華人の経済的ネットワークは東南アジア全域に広がっていて、ACS校で就学したことが仕事に大いに役立ちました。しかし、長い間シンガポールの地に足を踏み入れることはありませんでした。』

出張でシンガポールに行く機会ができ、意を決してACS校のかつての友人に手紙を書きました。パヤレバ空港（チャンギ以前の空港）に降り立つと、学友が大挙して空港に迎えに来ていました。通関で荷物チェックを受けている時、「Ando、Ando」と呼んでいる声が聞こえました。通関の職員は彼らは君の友達かと聞くので、そうだと答えましたら、検査をやめてもう行って良いと言ってくれました。

夜みんなが歓迎会を開いてくれました。どうしてもっと早くシンガポールに来なかったのかと学友から聞かれました。

「戦争のことがあって、後ろめたかった…」

「何を言っているんだ、俺たちは友達だろう」――』

安藤さんの母校、ACS校の校歌の一節にこんな歌詞がある。

「――Our students hail from China's plains, and the Land of Rising Sun.――（われらの学生は中国の平原からも、日出づる国（日本）からもやってくる）」

この校歌は今でもACS校の生徒によって毎日歌われている。

また百年史によると、1933（昭和8）年の日本人会理事21名の中に、公三さんのお名前を見ることができます。

ご親戚の方からのお問い合わせを発端に、日本人墓地公園に眠る医師、安藤公三さんの功績を知ることができました。

参考文献：

「昭南特別市史・戦時中のシンガポール」
シンガポール市政会 1986（昭和61）年発行

「シンガポール日本人社会百年史－星月夜の耀－」
シンガポール日本人会 2016年12月23日発行